

日本占領時期の周作人と『女声』雑誌の女性観研究

横浜国立大学 段毅琳

本研究の最終目的は、日本占領時期に上海で刊行されていた『女声』雑誌の研究を通じ当時の上海における女性解放思想の展開を明らかにすることである。本報告ではその一環として、同時期に同じ日本占領地区で活動していた周作人の女性観との比較研究を通して、『女声』雑誌の特色を明らかにしていく。

『女声』雑誌（1942.5～1945.8、編集長佐藤俊子・編集者関露等）は日本大使館と日本海軍報道部が提携し刊行した雑誌だが、内容からみると完全に日本軍の統治に利用されていたわけではなく、同雑誌には佐藤俊子と関露のフェミニズム思想が反映されていた。キーワードは「労働者に対する関心」と「社会主義の立場」の二つである。佐藤は積極的に女性の社会進出を主張し、共産党地下工作者という特殊な身分であった関露は女性の国家民族に対する責務を唱えた。

周作人は1940年代、『女声』雑誌に『女子与読書』を寄稿した。日本軍の文化面での協力者と考えられがちであった周作人であるが、同文中では「家庭における両性平等というジェンダー意識」を表現しており、それは占領区の主流を占めた「良妻賢母」思想と一致してなかった。

しかし主流思想と一致してはいないといっても、周氏の女性観は『女声』雑誌とも異なっていた。それは家庭という枠組みの中で論じられたものであり、日本占領時期の女性の社会進出については消極的であった。『女子与読書』が発表された際、『女声』雑誌は同文を巻頭に掲載したものの、それに対して一切言及せず沈黙を守った。そして沈黙は周氏の女性観に対する反駁或いは不同意の表れであった。

これらを手掛かりとして、現在までほとんど言及されることのなかった1940年代における周氏の「良妻賢母」、「婦女回家」等の女性観と『女声』雑誌の女性観を比較し、民族・国家の衝突および新旧勢力の駆け引きという特殊な環境の中で、彼らがどのようなフェミニズム思想を展開していったのか。彼らの動きを克明に再現し、『女声』雑誌の特徴をより一層明らかにしていきたい。